The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	夢を見ることを忘れた頃に ： 安西法師の奇蹟
Author(s)	福田, 安典
Citation	詞林. 2008, 44, p. 79-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

夢を見ることを忘れた頃に

――安西法師の奇蹟――

福田　安典

物語の登場人物たちは、普言を見た性空と同様の「夢を信じた人々」（西郷信綱『古代人と夢』）であった。この物語における人々の確信を支えているのは、発端となったある人の見た夢への、無邪気でひたすらな信仰である。夢はかつて神秘的な交信の回路であり、神や仏とも、夢を介して話をすることができた。

（荒木　浩『日本文学　二重の顔』より）

かつて、日本には「夢を信じた人々」がおり、そのため夢は神秘的な交信回路であり、そこからは多くの「物語」が生れたことは了解している。その文脈において、「かつて」という言葉を意識的にせよ無意識的にせよ、つい使ってしまうところに、「夢を信じた人々」を古典世界の中に囲い込んでいるのである。その囲い込む主体とは何かと問い直してみれば、それは古典と対峙する、もしくは古典を憧憬、睥睨せんとする「現代人」である、とするのは浅薄な直線的思考であろう。「現代」の前にはあたりまえながら、「近世」期がある。近世期は黄檗禅、朱子学、陽明学、心学など新たな魅惑ある思想界の活動を承けて、明清の学を継承する三教一致、考証学などが新たな展開を見せ、それに呼応するかたちで在来の佛教も大きく変貌したことなどは周知のことであろう。「夢を信じた人々」を指して「かつて」という辞句を冠することが出来る主体は、時系列的に言えば、まずこの近世期の人間に指を折らねばならないであろう。本稿ではかかる人間たちが棲息した時を「夢を見ることを忘れた頃」と仮称することとする。

1　安西法師の物語

安西については、すでに人名辞書等に散見するが、『予州安西法師往生記』（以下、『往生記』、初版は正徳頃刊）によっておおよそが知られる。伊予大洲版『往生記』（安政五年）によれば俗名は村松と言ったらしい。以下、『往生記』に拠って梗概を記し、必要に応じて原文を示すこととする。

安西は寛永十七年生れ、予州宇和郡奥浦の人で、漁師で

あったが、出家の望みがあったために、妻を迎えず、十九で父を亡い、三十四に母を亡った。母七年忌に四国巡礼をし、大洲寿永寺に入り、高譽を師として出家、安西と号す。この時四十歳。後に寿永寺の末寺、中村の本誓寺に住持する。本誓寺には慈覚大師御作の阿弥陀如来像があった。安西はもとより文盲であったため、回向の際にも俗名で「何右衛門、何兵衛、何信女」などを「平にとなへて、聞をも恥じず、回向するさま、思ひ入りたる実のすじ」のある僧であった。日々、念仏の行者として尊敬されていた。

宝永六年三月、七十歳となった安西は寿永寺の光譽、大蓮寺の誓譽その他を招いた。その理由は、安西が見た「霊夢」にある。ある夜、夢に阿弥陀如来が現れ、安西を極楽浄土へと誘った、とのことであった。

この霊夢を得てますます欣求の念が募った安西に次の奇蹟がおきる。同年十月に、阿弥陀本尊より「来年寅の三月十五日、巳午の間に、病患もなくかならず浄土へむかへずるぞ。敢て疑ふことなかれ」という再度の夢の告げであった。このあたりは、原文には、

同四日といふに、寿永寺に行く。「しかしかの御示現あり」と、往生の期を語り出るに、寿永寺及び浄化の人々、直に聞き、伝て聞くも、敢てこれを信せず、「何事をいふやらん」と嘲り笑ふ族もあれど、

と記される。近世期になって、「夢を見ることを忘れた頃」に安西の霊夢はもはや荒唐無稽なホラ話と受け止められてしまったのだ。しかも、少なからず信仰心のある人間の反応が「敢てこれを信せず」と、さらには「嘲り笑ふ」であったことは注意しておくべきであろう。

安西は、それでも気にせずたゆみなく念仏していると、三度目の霊夢に出会う。その年の十二月晦日の通夜念仏の時に、まどろみの中で本尊の声がする。「汝、来年三月十五日、巳午の中間、時日たがはずいよ〳〵迎へん。諸人は聞て疑ふとも、汝は信を堅ふせよ。兼て期を示し、大往生をなさしむるは、諸人に念仏を勧めん為ぞ。今とやかくの疑ひは、往生だにもしほせば、をのづから散ずべき也。そのときの為にてあれば、今夜の告げも、遠慮なく人々に語りをけ」という。安西は翌日、元旦にも拘わらず大蓮寺の誓譽上人のもとに走り、その告げを語り、そのまま大洲城下に出て、

そののちは城下へ出で家々に入り、「我は安西といふ者なるが、来る三月十五日、日中に本誓寺にて、大往生を遂ぐるなり。各々も念仏してあやかり給へ。我ながらあやかり物ぞ」といさむすすみて触れひびかせば、「あなさうゞ〳〵し。年の始めにかかることこそ、ただにはあらじ。狂乱にや」と沙汰しあひけり。

といった騒擾を起す。「夢を見ることを忘れた」人々にとっては、安西のふるまいは狂乱としか思えなかった。しかし、安西はまったく気にせず、自らの葬送の用意を整えていく。そのありさまは周囲には奇異に写り、誓譽上人でさえ、

「むかしより夢中の感を容易に人に説かざることは、仏祖の深き制誡なり。殊に夢には虚実あり。汝、漫りに説くをもって、人あへてこれを信ぜず。却て狂乱のわざと嘲ける。其上わ僧、起居飲食、常に異なる事なし。身躰ともにすこやかに、聊かの病苦なければなんぞ容易く往生を遂げられん。疑ふらくは、若し捨身往生ならんか」

と忠告せざるを得なかった。これが近世期の、しかも信心深いと根拠もなく決められる「田舎」での現実である。

安西は気にせず、いよいよ三月十五日となった。この時に及んで、世上の噂黙しがたく、大洲藩が関わることとなる。かかる事態に、支配階級たる武士が関わるところが良い意味で悪い意味でも江戸期の健全さと合理性がある。結論的に言えば、安西の霊夢に大洲藩が関与したために、この往生譚は単なる奇談ではなく、客観的な真実へと昇華することが出来た。近世的と言う言葉が付くにはせよ、「奇なる談」とは一線を画する「事実性」を持ち得たのであった。

大洲藩は、事の真相を見極めるために、法類を排除して、公儀よりの検使の前で、三月十五日を迎えることを命じる。検使の名は、城主よりの目付として青野喜左衛門と永井新蔵、代官の菊原権七、その外に和田伊左衛門、鈴木金七、岡本治兵衛、林金八等。居並ぶ、裃姿に帯刀の武士達の前で、見事に安西は往生を遂げた。

此時歓喜面にあふれ、身躰踊躍の躰にして立ちながら「ややしばし。諸人と共に念仏し」とばかりありて席につき、跏趺座して合掌し、独り高声に「南無阿弥陀仏」と聞こゆる事、二返して、其の三返に至るこゑ。低しときけば息絶ぬ。時に春秋七十一歳。顔色咲むがごとくにて、合掌すこしも乱れねば、検使方より「其の往生の実否を糺し明らめん」と脈をとり、様子を伺ひ、大に驚き、参詣の諸人に向かひ、

「安西坊こそ、只今正念往生」

と、大音声を以てよばはり給へば、覚へずしらず。「わ」と一同に嗟嘆のこゑ、念仏のこゑ、讃美のこゑ、響きを続いて久しく止まず。その中にははじめより信ずる人はおもひし事よと感涙を面にそそぎ、元来も疑ふ人は、「さはしらざりき。ゆるし給へ」と慚愧の袖を一時にしぼり、

以上が安西の物語である。

簡単に注を付けてみる。舞台となった大洲寿永寺は、大乗山寿永山、浄土宗知恩院末。天明二年の大火で焼失したのでそれ以前は不明。「寺伝によると、源頼朝が二僧を伊予につかわして上浮穴の頼朝寺とこの寿永寺を建立させ、それが寿永年間（一一八二―一一八四）であったところから寿永寺と称したといい、その創建は古いとされている。この当初の開山は義圓と伝えられる」（『大洲市史』）。文中の高譽は寿永寺十世、光譽は不詳。

本誓寺は、大洲市中村。寿永寺第五世学誉景光（一六五六寂）が創建した寿永寺の末寺。本尊の阿弥陀如来像は慈覚大師作と伝えられ、大洲市の文化財。現在は安西堂が残るのみで、四月一五日には法会がある。阿弥陀如来像、及び『安西往生図』は本寺の寿永寺が管理している。

平成二十年の六月二十八日に、愛媛大学地域創成研究センターの協力を得て、本会二百回を記念した研究発表会で、現寿永寺御住職小島泰雄師を大阪大学に招聘し、安西法師伝の絵解きをしていただいた。本来は、三幅の掛け物での絵解きであるが、会場と時間の都合で最後の一幅のみの高座であった。近世期の浄土宗の語りの面影を残す名口調と迫力に会場が酔いしれた。この小島泰雄師の語りは、『往生記』と異同があるが、それも累（かさね）物語を生んだ祐天に代表されるように、浄土宗の物語力を今に伝えるものとして貴重である。

大蓮寺は、大洲にあった。本文に「大蓮寺の誓誉上人　名ハ利億」と見える。大蓮寺は明治になって廃寺となり、寿永寺に統合された。この誓譽が安西の往生伝を知恩院に伝えた人物として注目すべきであることは後述する。大蓮寺は元禄四年に寿永寺十世高譽利夫によって開かれた。

検使役として記される和田伊左衛門、鈴木金七、岡本治兵衛、林金八等は、大洲藩記録『大洲旧記』に見える（小島泰雄「近世往生人「安西大徳の愚鈍念仏」―奇蹟以上のもの」、平成十四年三月『佛教論叢』四十六号）。先述したように、この『往生記』の最大の特徴は、江戸期に於いてはややもすれば処罰の対象となった武士の実名を挙げて出版されたことになる。逆説めいて言えば、この禁じ手ともいうべき所が「夢を見ることを忘れた頃」におけるもっとも効果ある証左となっているのである。信仰を排除した支配階級の武士によって証明された安西の往生は、「奇談」ではない。まぎれもない「奇蹟」であった。

2　安西伝の伝搬

本来は、伊予の地でひそかに語られるか、「諸国話」として採録されるのを待つはずであった安西の伝記は、ただちに京都の知恩院獅子谷法然院に伝えられ、そこで出版されることとなった。その経緯は正徳版『往生記』に詳しい。

安西法師脱白の因由、臨末の祥瑞、予州大蓮前住誓譽上人の親しく観る所なり。復た以て後世に伝ること無きことを慮りて特に獅子谷に来て吾が先師忍老和尚に告ぐ。先師、坐脱自在なるを感喜してその記く（文化版では「を」）為さんと欲し、疾て未だ果たさず。滅度に垂たる時乃ち門人龍河に嘱して記せしむ。河、聞くに随え随て録す。

（原漢文、用字は適宜改めた）

安西の入寂は、宝永七年（一七一〇）であり、文中の忍澂の没年はは正徳元年（一七一一）、この記事が記された正徳二年は当然一七一二年となるので、ほとんどリアルタイムの速さで、伊予の安西の往生伝は京都知恩院にもたらされたことになる。もたらした人物は、前述の予州大蓮寺の誓譽上人である。

忍澂は文中に出てくる「忍老師」のことで、正保二年生、江戸増上寺で出家し、延宝九年に鹿ヶ谷（獅子谷）に法然院を建立し、道場とし、公家、将軍家からの帰依を受ける。法然院の明版『大蔵経』と建仁寺の高麗版との校訂に努めたことで知られている。著書も多い。近年、中国の善書の刊行者としても注目されつつある。正徳元年十一月十日死去（六十七歳）。浄土宗屈指の学僧にして、和漢の学に通じ、法然院を本拠地として多くの著述を手がけた

龍河は、本文末尾に「獅子谷門人　龍河」「書於観智教院閑窓下」とある。『忍澂和尚行業記』（享保一四年刊）に、「江州彦根観智院者獅谷門流之一刹也。前住龍河、現在浄月」、「亦名、玄津」、「稟性、強記。弁慧。凡書籍一聴。即成誦。亦通理義。因博渉猟内外二典。尤善倭文」とある。忍澂の臨終に立ち合うほど忍澂からは目をかけられた学僧であった。特に倭文を善くしたとあるので、和文で編まれた『往生記』の実質的著者としては、この龍河が最適である。

すなわち、安西の伝は、伊予の誓譽からいち早く京都法然院の忍澂という稀代の学僧にもたらされ、その弟子中で忍澂の信も篤くかつ和文を得意とした龍河の手によって編集されるという当時においては注目すべき往生記となった。

但し、『忍澂和尚行業記』には、安西のことは記されていない。

3　安西伝の出版　その一
―京都知恩院獅子谷白蓮社・彦根観智院

上述のように、伊予大洲から、京都にもたらされた安西の物語は、忍澂の学房周辺で門人彦根観智院龍河の手によって成文化された。そして刊行の運びとなる。

簡単に書誌を記す。半紙本一冊。無地うす縹色表紙。外題（刷左上、子持ち枠）「豫州安西往生記」、内題なし。柱刻、丁附のみ。本文三十一丁。跋「正徳壬辰三月望日沙門覧光識于

雑東獅子谷白蓮別坊」一丁。末尾（後見返し）に、

右
安西法師往生記一巻獅子谷門人
龍河　欽承
先師忍澂老和尚之顧命書於湖東
観智教院閑窓下

とある。この末尾は識語とも刊記とも見なせるもので、本書の刊行が忍澂の遺志を受けたものであること、龍河の編であることが明示されている。龍河については、覧光の跋文に、

其の国字を用るは男女の輩をして読み易く解し易く、往生の信根を起し易からしめんと欲するなり。記成りて証を需む。

と記されていること（原漢文）に、先引した『忍澂和尚行業記』中の龍河についての「尤善倭文」という記述をつき合わせてみれば、その編者としての姿勢、刊行の目的が見えてくる。すなわち、この安西の伝は単なる往生の奇蹟を世に知らしめるだけではなく、漢文に疎い読者を強く意識したものであり、そのためには「ひらがなまじり（国字）」で、しかも「読みやすく解しやすい」ものでなければならなかった。そして長編ではないことも意識していたのであろう。その編者として龍河はうってつけの人物であったのである。

その意味では、この『往生記』は通例の往生記とは性格を異にしているのかもしれない。出版を前提としていること、その読者として一般を想定していること、この二点に出版の力を十分に知っている近世期の「往生記」の典型を見ることが許されよう。

4　安西伝の出版　その二
―山口長門・西圓寺、萩・報恩寺

正徳版『往生記』は、さほど摺られることもなかったのであろうか、現存する正徳版は少ない。その限りに於いては、汗牛充棟たる近世仏書の中で埋もれていっても不思議ではなかった。ところが、文化十二年に長門の西圓寺と萩の報恩寺によって再刻がなされたことで、『往生記』は再生した。

文化版の書誌を記す。半紙本一冊。布目茶表紙（架蔵本、西圓寺所蔵本は緑色であることを尾崎千佳氏により教示を受けた）。外題（刷左上、子持ち枠）「豫州安西往生記」、内題「總譽安西法師往生記」。柱刻、丁附のみ。序として正徳版にはない、「再刻安西法師往生記端書」（「文化十二年臘月八日沙門隆圓。洛東一心山専念寺の託静室にてこれをしるす」）二丁を加える。本文三十一丁。全くの再版であるので、挿し絵、本文に異同がある。

もっとも大きな異同は、「再刻安西法師往生記端書」の序を付加したこと、原跋の後に「文化十二年乙亥十二月五日寂長州　大日比　西圓寺法洲／萩　報恩寺定仙　敬記」とある半丁を加え、正徳版ではそこに置かれていた刊語「右　安西法師往生記一巻獅子谷門人　龍河　欽承　先師忍澂老和尚之顧命書於湖東　観智教院閑窓下」を削除し、本文の最後に移動させている。この操作によって、正徳版における忍澂や龍河の位置づけがやや減少し、再刻者である長門や萩の功績が強調される。

この長門西圓寺と報恩寺との関係については、次に見られるとおり、長門西圓寺が中心であった。

再刻安西法師往生記端書

安西法師愚鈍無智の身にして不可思議の往生を遂られしさま。此書につまひらかにして。かの往生せられし。宝永七年庚寅といふとしより。ことし文化十二きのとの亥にいたるまで。すでに百とせあまり。六とせを過ぬれど。今なほ人の口に残りて。かたりつぎいひつぎぬるは。その徳の大なるがいたす所なンめれど。またこの書のしるしとすべきにあればなり。さるを天明の火に。此板もやけうせにしを。長門の国大日比浦の法岸和尚。ふかくなけき給ひしかば。その門人定仙上人同門の託阿上人等と相はかりて。おの〳〵衣鉢の資をはぶきて、ふたゝひ梓にはのぼせ給ひけるなり。そのことを遠くおのれに託し。このゆゑよしをも端書せよとのもとめいなめかたければ。その年月をかいつくるとて。さて思へらく。そも此往生極楽の道は。たとひ一代の御法をよく〳〵学ひぬる人なりとて。それによりてゆかんものかは。たゞわか身は出離の縁なきものと思ひ知りなば。ひたふるに本願にうちまかせ。念仏するほかはあらじかし。さらばいかなる智者学生なりとも。たゞ此安西を標準とし。かくのごとく投機し。かくのごとく念仏してこそ。めでたく素懐は遂侍りなんかし。たれ〳〵もこれをよみ。これをきゝ得なば。こざかしき心をうちすて。たゞ平に助給へと思ひ。南無阿弥陀仏。なむあみだ仏とまうすくせつき給ひて。いさきよく極楽に生れ給へかしと。思ふまゝをかいつけて。此書のふたゝひ行はるゝを随喜し侍るになん。

文化十二年臘月八日。沙門隆圓。洛東一心山専念寺の託静室にてこれをしるす

正徳版『往生記』が天明の火災によってその版木が焼けてしまったので、長門大日比の法岸が再刻を決意、弟子の定仙（報恩寺）と託阿（西圓寺の法洲）とともに苦労して梓に上せたという。この天明の火災は、天明年間の寿永寺の火災をさすのであろうか。とすれば、版木は大洲の寿永寺にあったことになる。

再刻の発案は大日比浦、西圓寺住の法岸であった。西圓寺は、本慶山天龍院。浄土宗。知恩院直末寺。法岸は円蓮社光譽と号し、字は性如、「山口県寺院沿革史」に「特筆すべきは当寺三師之伝是也。即ち法岸、法洲、法道の三上人は高徳学僧の三僧にして之を著述せる大日比三師伝に詳述あり」とある。増上寺などで修行し、『臨終要語』などの著書がある。法岸は、延享元年生まれで文化十二年十二月五日七十二歳で没しているので、この「再刻安西法師往生記端書」は法岸没後直後、その三日後に書かれていることになる。

西圓寺は漁師町に位置し、おもに漁師たちによって信仰されてきた寺である。大日比は鯨を供養した「鯨墓」（元禄五年）が有名で、鯨供養の「過去帳」が残されている。大日比流と称される同寺の回向文は釈迦から始まり、善導、歴代住職、檀家に続いて、魚鱗、鯨、田の虫などを読み上げる。西圓寺が『往生記』を出版したのは、単に知恩院の威光をかすめようとするのではなく、無知なる漁師達に専修念仏を勧める際に、やはり愚昧で念仏しか唱えなかった安西が、もとは漁師であったことが大きく関係していると思われる。

それに加えて、法岸自身が安西を敬慕していたこともその大きな理由であった。法岸の伝は、弟子の法洲が『法岸和尚行業記』（文化十四年）としてまとめるが、同書を繙けば法岸が安西を憧憬して四国遍路に来たことが記されてる。

かくて七月十四日伊予の国、安西和尚の遺跡、本誓寺にいたらる。兼て法師の、丹直仰信の行者にして、大往生を遂げられたるを、深く仰慕せらるるが故に、一両日此処に留錫して念仏せらる。

この時の法岸は二十一歳、明和元年頃（一七六四）頃であった。

法岸の意向を受けて『往生記』に関わった二人のうち、定仙は萩津守町の瑞雲山報恩寺住、十三世住職（「山口県寺　院沿革史」）。『法州和尚行業記』文化十一年二月の項に「廿三日より廿九日まで、萩報恩寺に於て別行を修したまへり。総て萩門中、師に法施を願はるること、連々上に挙ぐるがごとし」とあって、法洲との交流が記されている。もう一人の託阿は法洲（ほうじゅう）のことで、明和二年、長州大津郡河原郷の中井家に生まれた。大日比西圓寺の法岸について出家した。日課念佛三万遍を誓い、三経一論五部九巻を学び、京都転法輪寺、増上寺で学んだ。各地で弘教に従事し寛政九年には、香衣綸旨を受け、豊岡の来迎寺・大阪の大乗寺、和泉の西光寺の住職を経て、江戸に下り、増上寺山内の弁信の学寮に戻った。

その法洲が法岸の命によって大日比西圓寺を継いたのが文化九年である。以後、周防や長門に勢力圏を広げ、一向宗門徒と対立した。後に羽島に配流となるが、翌年赦免。天保十

年没。法岸の遺志を継いで、『安西和尚往生伝』を出版したはずの法洲であるが、不思議とこの一事は『法洲和尚行業記』（明治一四年）にはその記事がない。

「再刻安西法師往生記端書」を記した隆圓は、『法岸和尚行業記』跋文にも「時に文化十四年六月五日託静室八一窓のもとにてしるし侍る　洛東専念寺　沙門順阿隆圓」と記している。『法洲和尚行業記』には、

去年の冬（註文化一三年）、師の道友京師専念寺隆圓上人のもとへ、老師の行業記の草稿をおくり、其校合を請れしに、上人随喜のあまり、速に開版し利益を無窮に施さんとて、今春しきりに師の上京を促され、又受化の道俗も挙て上木を勧むるものから、二月十六日大日比を発し、沿道諸寺院の請に応じ、四月七日専念寺に著せらる。

とあるので、法洲の出版活動に於ける重要人物と見なされる。とすれば文化版『往生記』の版行に際してもこの隆圓が何らかの働きを果たしたと見てよい。すなわち文化版『往生記』の調製は京都であったと思われる。

ここまでの長門の動きを整理してみる。

法岸の伊予大洲遍路（明和元年頃）
↓法岸の西圓寺住持（安永七年）
↓正徳版『安西和尚往生記』の板木焼失（天明年間）
↓法洲の西圓寺住持（文化九年）
↓法岸示寂（文化十二年十二月五日）
↓『往生記』隆圓序文（文化十二年十二月八日）、この時に出版か？
但し、法洲らの跋文に「此書翻刻未成本師和尚示寂、弟子等遺憾之余」とか「回向」の文字が見えることから、翌年以降か
↓法洲ら『正邪強会弁』刊行（文化十三年十一月）
↓法洲、『法岸上人行業記』草稿を隆圓に送る（文化十三年冬）
↓法洲、『法岸上人行業記』出版のために専念寺へ（文化十四年四月）
↓『法岸上人行業記』出版か（文化十四年六月）

法岸に端を発した『往生記』の再刻は、法岸の死を悼む法洲ら弟子の手により、京都の隆圓の助けもあって上梓されたのである。そして、それは同時に新たに西圓寺を継いだ法洲の記念すべき最初の出版でもあった。にも関わらず、いかなる理由があってか、『往生記』のことは『法洲和尚行業記』には記されていない。

5　安西伝の出版　その三
―江戸版・三縁山西渓竹叢軒

『往生記』は、この後に江戸の増上寺周辺で出版され、三度注目されることとなる。今、もっとも普及しているのはこの江戸版だとも言われている。

小島泰雄氏ご所蔵本によって記せば、江戸版は、半紙本一冊、黄色、菱つなぎ模様表紙。外題（刷左上、子持ち枠）「豫州安西往生記」、内題「總譽安西法師往生記」。柱刻、丁附のみ。「因今茲天保十一庚子夏六月更鋟于梓以授同志　三縁山西渓竹叢軒蔵板」の跋文がある。正徳版や文化版とは異同があり、新たに版を起こしている。西渓は不詳。竹叢軒は、同名の浄土宗寺院が港区芝公園に現存する。この竹叢軒が、西渓の居た処だとすれば、すなわち近世期に於いては増上寺の支配内にあったと思われるが、いわゆる増上寺の子院にその名は見えず、明治二十二年の増上寺編『武蔵国所管寺院調簿』にも名が見えない。ただ、三縁山の名を堂々と冠したこの書物について、増上寺が全く関知していなかったとは考えられない。

この江戸版は、正徳版の原見返し（文化版では本文末尾）の「右　安西法師往生記一巻獅子谷門人龍河　欽承　先師忍澂老和尚之顧命書於湖東　観智教院閑窓下」を削除し、さらに文化版の隆圓序文と刊語を削除している。代わりに、

這伝也。顕仏願不思議於末運鈍漢。遂往生一大事於検使目前。宴浄業者流之左券也。第憾其板以遠在西国、東方士庶未知有此奇跡者許多矣。因今茲天保十一庚子夏六月更鋟于梓以授同志。　三縁山西渓竹叢軒蔵板

という跋文もしくは刊語が付される（波線、筆者）。このことから、二つの姿勢を読みとることが出来る。一つは、この他版を参照することなく単純に江戸版のみから得られる情報は、白蓮社忍澂の権威は称えるものの龍河は名のみであること、長門の法岸・法洲は名さえ記されないことである。これらを「其板以遠在西国、東方士庶未知有此奇跡」と一括し、あたかも等閑視しているとさえ思われる書きぶりである。では、江戸版はなにゆえに作成されたのであろうか。もちろん、そこには安西に対する畏敬はあるのではあるが、正徳版に見られた忍澂、文化版に見られた法岸のごとき、安西の奇蹟に対する賛嘆の姿勢は薄いように思われる。その意図はこの跋文から読みとられるもう一つの姿勢でもある。

江戸版がこの安西伝においてもっとも評価しているのが、波線部、すなわち「城主からの検使役の前で、往生して見せた」という事実である。「夢を見ることを忘れた頃」に、いまだ「夢への無邪気で、ひたすらな信仰」を呼びかけるには、正式役人の証人喚問という手続きが必要とされる、といういかにも近世的、現実的な往生人が求められていたのである。

江戸時代における正式役人とはいうまでもなく支配階級たる城主と武士が最適であることは論じるまでもないであろう。

すなわち、江戸版とは夢を見ることを忘れ、奇蹟への信仰も薄れがちである「東方の士」たちに、有無を言わせない「事実」を、三縁山の名のもとに知らしめることであったのであろう。

6　安西伝の出版　その四　―江戸再版

江戸版は評判がよかったらしく、嘉永元年になって、その再版が出版される。竹叢軒版の跋文一丁を変えたもので、「因今茲天保十一庚子夏六月更鋟于梓以授同志　嘉永元申年初夏再刻　三縁山西渓竹叢軒蔵板」とあって「嘉永元申年初夏再刻」が強調される。通常は、かかる寺院版において再刻が強調されるのは、版を改めた場合か蔵版者が交替するかのいずれかであろう。『往生記』の場合は、本文と蔵版者は同じであるので、この再刻をわざわざ謳うために跋文を彫り改める意図は把握しがたい。その営為はあたかも坊間書肆のようでもある。それとも三縁山版が版を重ねるということ自体に意味があったのであろうか、いずれにしても今後の課題としたい。

7　安西伝の出版　その五　―伊予大洲

『往生記』はその後に伊予大洲でも出版される。大洲寿永寺の蔵版によるものである。安政六年が安西の一五十年忌にあたるため、その前年に刊行。板木が大洲に残されていたが、腐食したため、昭和十六年に、複製が出される。ちなみに、この大洲版は希覯であったらしく、伊予史談会は昭和七年、横田伝松氏蔵本による写本を作成。原本は確認できていない。全くの異版であって、地方の出版物として注目される。

8　終わりに代えて　―　遍路との関係

『往生記』は、近世期の夢を見ることを忘れた頃に「夢の奇蹟」を語るために、出版という手段と、武士による検使事実という、いかにも近世的な武器を備えている。しかも、その有効性は一過性ではなく、時と所を変えて四度の版行（跋文のみの改刻を含めば五度）に及ぶ。その中に忍澂の獅子谷法然院や増上寺が関わってくることもまた注目すべきであろう。その意味では近世期の浄土宗の動向や唱導の方向性を考えるに際しては多くの示唆を与えてくれると思われる。

以上をもって本稿を結びたいが、『往生記』は遍路資料の空白期を埋める資料としてもまた注目すべきでありながら、説かれたことがないので、最後に贅言を加上する。

遍路については、江戸中期以降の資料が圧倒的に多く、初期の資料が少ない。安西は「母七年の忌辰を迎へ、まづ其遺言にまかせて。四国の霊地を巡礼し」たと記される。三十四歳で母を亡くしているので、四十一歳に巡礼したことになる。

安西は宝永七年寅の歳（一七一〇）に七十一歳で没しているので、延宝八年（一六八〇）がそれにあたると思われる。この「四国の霊地を巡礼」は、後の寿永寺で作成された絵解きにははっきりと「四国遍路」と記されているので、四国遍路と同義に解釈して差し支えがないであろう。すなわち『往生記』は、延宝期における一般民衆（出家以前）の遍路資料として認められる。

ついで、長門西圓寺の法岸も遍路をしている。法岸二十一歳の時（明和元年頃）である。『法岸和尚行業記』に、

師二十一歳の早春、江戸をたちて（中略）猶四国八十八ヶ処を巡らんとて、四月中旬、備前の国より四国にわたり

として「四国八十八ヶ処」と明記されているので、これも遍路とみなしてよいであろう。その法岸の遍路で注意したいのは、

経国の内に、種々艱難の事多かりし中に、所も語られしかど忘れたり、前後七八里斗の、人はなれたる所にて、癩病をうれふる夫婦の者に道づれとなりしが、

という記事である。癩病と遍路との関係については述べる余裕はないが、遍路研究において重要な要素であり、個々の事例の報告が待たれている領域である。明和期の事例として『法岸和尚行業記』を報告しておきたい。

遍路の新事実として、延宝期の安西、明和期の法岸の二例を示す余慶をもって本稿の結びとしたい。

なお、本稿を成すにあたり、寿永寺小島泰雄御住職、西圓寺西村文成御住職、尾崎千佳氏、愛媛大学地域創成研究センターを始め多くの方のご協力とご支援を得た。末尾ながら茲に謝辞申し上げる。

（ふくだ・やすのり　愛媛大学教授）